

◆新技術定着試験

シラヒゲウニ地蒔き式養殖試験Ⅲ

本部駐在

與那嶺盛次

1. 目的

シラヒゲウニ(以後ウニとする)は、本県ウニ漁業唯一の対象種であるが、近年乱獲等により資源が減少し市場価格が上昇している。ウニの種苗生産技術や養殖技術は県栽培漁業センターや県水産試験場で開発され普及に移されている。

そこで、昨年度に引き続き県栽培漁業センターの協力を得て具志川磯根資源活用研究会と種苗生産を行い、その種苗を用いて2回の地蒔き式養殖試験を実施した。

2. 材料及び方法

第1回試験に使用したウニ種苗は、具志川磯根資源活用研究会の簡易種苗生産施設で生産した平均殻径46.1mmの966個であった。試験場所は、地蒔き式養殖の漁業権が取られている具志川地先のホンダワラ藻場の中央部であった。そこに鉄筋とロープで10m角に印をし、平成19年6月15日にウニ種苗を放養した。

養殖期間は、平成19年6月15日から平成20年1月28日までの228日間であった。養殖期間中5回、毎回各50個体の殻径を測定した。

第2回試験に使用したウニ種苗も同様に生産した平均殻径39.4mmの2,842個であった。試験場所は同海域の沖に向かって右側の平成17年度放養した同じ場所に平成19年11月26日放養した。

養殖期間は、平成19年11月26日から平成20年6月5日までの193日間であった。養殖期間中5回、毎回各50個体の殻径を測定した。

3. 結果及び考察

第1回試験では放養約1ヶ月後の7月13日に

本島を台風が直撃したが、放養ウニは岩の窪み等に避難してほとんど移動しなかった。平成20年10月24日(約4.4ヶ月間)平均殻径69.9mmに成長したことから190個を取り上げ、生ウニ加工業者をとおして県漁連市場に16パック(1パック100g)を試験出荷した。セリ価格は、平均1,523円/パックであった。産卵期に入っていたため、身が流れやすく身入りが悪かった。

以後取り上げたウニは、養殖場の別の場所に再度放養した。平成20年1月28日(約7.6ヶ月間)までの取り上げ数は568個で、生残率は58.8%であった。

第2回試験では、平均殻径39.4mmのウニ種苗が約6ヶ月間で平均殻径68.5mmに成長して出荷サイズになった。冬季の期間が含まれているため成長が遅くなったと思われる。取り上げ数は、1,489個で生残率は52.4%であった。

取り上げた1,412個を生ウニ加工業者をとおして県漁連市場に出荷した。生ウニは、134パック(1パック100g)であった。県漁連セリ価格は平均1,332円/パックであった。出荷量が多かったため安くなった。

具志川地先のホンダワラ藻場は、数種類のホンダワラ類が周年をとおして繁茂し、ウニの隠れ家となる岩の窪み等が多いことから、囲いをせずともウニの移動は少なく成長や身入りが良好であった。これらのことから、当海域は地蒔き式養殖漁場として最適であると考えられる。

4. 今後の課題

今後は種苗生産の安定を図り、出荷時期や出荷方法の検討も行いたい。



①シラヒゲウニ簡易種苗生産施設



②ウニ幼生の回転飼育装置



③波板飼育水槽



④第2回地蒔き式養殖試験海域



⑤養殖試験中のシラヒゲウニ



⑥取り上げた地蒔き式養殖ウニの一部

◆技
1.
現
に頼
響を
繁茂
そ
定的
参考
接合
立に
一
いた
の藻
この
異な
そ
大培
した
中
ため
認を
2.
梅
水槽
が終
網を
験を
3.
平
孢子
に扱
FRP